



卓 話

「映画作り・映画監督として」

映画監督 タナダ・ユキ氏

本日はお招きいただきありがとうございます。映画監督をしているタナダユキと申します。何から話したらいいかと思いますが、私は助監督の経験を積むなどして、映画業界で監督をしているという経歴でもなく、また幼少のころから映画を見るのが大好きだったというわけでもありません。北九州市という地方で育ったので、公開されても大作の映画、観客が2、3人しかいないという環境の中で育ってきました。



それでも舞台の方に興味を持ちはじめ、そうしたものが自分が作るということになった時、映像の方が向いているのではないかと感じ、その時はどうやったら映画監督になれるのか全くわかりませんでしたので、とりあえず作ってみようと思ったのです。それが予期せず、小さな賞を頂くことになって、映画を作るという仕事に少しずつ携わっていくことになりました。

★原作と脚本と映画監督と重要性の序列をつけるとしたら

原作の大切さについては、悲しいことに日本の映画の現状では、なかなかオリジナルの映画の企画が成立しません。やはり漫画でも小説でも何か原作があって、ある程度知名度のある作品の方が映画化し易いのです。映画は芸術だと思っている方もいらっしゃると思いますが、実際はこの業界もビジネスなので、投資として安心できる素材、例えば原作が何万部売れているとかというような要素がなければ、お金を出してはもらえません。もちろんそれだけで芸術性は全く考えなくていいのかというと、そういうことではありません。ただ、現状は何万部売れて、何かの賞を受賞した作品を使うことになると、著作権の争奪になります。例えば自分が読んだ本を面白いと思ったけれども、その本が何か小さな賞を受賞したら、もう読んでいる時点で著作権を取られているということもあります。そういう意味では原作は大切です。ただ、私自身監督として個人的には原作で良いものでも、映像化してもいいとは限らないと思っています。やはり映像化に向き不向きな作品があります。分かり易いところでは、主演が誰か、脇役にどのクラスの

役者が出ているかということが重要視されます。正直いいまずと監督をやっている方は誰でもそう思っているのではないかと思います、その役にあった俳優が来てくれるのであれば、俳優さんは全員無名でも問題がない。名前が売れていることなどは関係ないのですが、それではなかなか企画が通りません。

監督の立場の私として最も大切にするのは脚本です。いい原作があったとしてもそのまま映像化というのは不可能で、原作は例えば小説なら小説で完結してしまっているものを、新たに解体して映像にしなくてはなりません。また漫画は漫画で絵がある分、イメージが出来上がっているのが難しいところです。脚本というのは映画づくりにおける全ての設計図だと思っています。それがちょっとでも狂ってくると最終的におかしなものになってしまうので、私は脚本が面白くなければ、どんなに原作が良くてもそれを駄目にしてしまうと思っています。逆に原作がそれなりの作品であっても、そのテーマとは違うアプローチで映画として成立しうる脚本を作るといったことの方が大切です。

監督という立場は、最近ではよほどの映画マニアではない限り、監督やカメラマンが誰か気にしません。自分がやらせてもらって思うのですが、自分が色々な局面において全部判断しなくてはならず、その責任が全て自分にかかってくるということがありますが、よく考えてみると自分の知っている監督を見る限り、何が出来る人達ではありません。例えばカメラの才能があればカメラマン、照明の技術があれば照明係となりますが、監督は何も出来ない。結局現場にいる人達に盛り立ててもらっていて、神輿の上に乗せさせてもらっていると感じています。だから上手くその神輿に乗ることが出来る監督が良い監督だと思っています。監督の技術は何かと言われても、殆どはたつたりの世界で、困ってしまいます。私の知っている監督ではビデオの録画予約が出来ない方もいるので、本当に何も出来ない、何か人たらし的な役なのかなという感じがしています。本当にいい加減な人間が多いので気をつけてください。

★映画を作る裏方について教えて欲しい

映画というみなさん俳優さんが注目されますが、実際映画を作ってみると、この人達は裏方のスタッフの頑張りに助けられています。

具体的にそういう人達はどんな仕事をしているかといいますと、例えばカメラマン。彼らは映画における絵作りをする人達でとても重要な役割です。そしてそのカメラマンにとって誰と組むのが大切かと言いますと、監督というよりむしろ照明係ではないでしょうか。大体カメラマンはい

つも決まった照明係を呼ぶことが多いですね。私自身、映画を作るにあたり、光の当て方次第で外は夜なのに明け方の光にしたり、夕方の光に出来たりするのを間近で見て、感動を覚えました。映画は嘘を重ねて出来ているものと言えそうですが、照明の当て方で時間を変えられるのは照明係の腕にかかっていると思います。

また録音の担当も相当大変な仕事です。とても長い竿にマイクの先を付けて持っているのを見た方がいるかもしれませんが、この竿が長くなれば長くなるほど尋常じゃない重さになります。一度持たせてもらったことがあります。それを長いシーン持っているのは本当に大変だと思いました。最近では録音係、照明係も若い女の子が多く、私よりも華奢で小さい子が竿を持っていて驚かされることがあります。

映画は先ず企画があって脚本、キャスティングを決め、現場にクランクインして撮影をしてから、仕上げの編集作業だったり、音楽を入れたり、長い期間がかかります。脚本家は現場がクランクインしたら、後は訳の分からない監督に作品を託さないといけない。ある意味辛い仕事だと思っています。

録音する音声さんは現場のスタートから最後の仕事まで一緒にいる人達です。音声もまた仕上げていくと面白い作業で、ラッシュという撮った素材を音抜き状態でフィルムが感光しているかどうかを確認する作業ののち、どういう音を入れていくか判断していくのですが、風の音の一つとってもそれを入れていくことで映画が変わっていきます。嘘の世界ではあるけれども、それで登場人物の心理が表現出来たりするのは本当に面白いことだと思います。

美術さんについては、セットを組んだり設計図を書いてくれたりというような仕事をする方々です。今日お持ちしたのですが、こうした図面のようなものを美術さんがきれいに引いてくれます。

また、一番地味で過酷な仕事で、そして誰も褒めてくれない部門はなにかというと、制作部といわれる人達だと思います。例えば脚本のト書きに書かれていた工業地帯とかいうシチュエーションを作るため、いろいろな工業地帯を走りまわり、監督が納得するような場面を設定するというような仕事をしています。制作部もセンスがあって、それがないといつまでたっても監督にオッケーをもらえる場所を探してこられませんね。最終的にカメラマンも監督も現地に行きますがロケ地の当たりを付けてくるのが制作部です。また、現場の撮影をする時など、一般道を使うこともありますから、その許可を取り人止め等の仕事をします。皆さんカメラを回していると、ある程度納得をして避けて通ってもらえますが、中には苦情を言い出す方もいます。そういう時に真っ先に制作部が対処してくれます。またお弁当を注文して配るなどといった地味なこともしますが、これはとても重要なことです。特に予算のつかない現場はお弁当になると冬場に冷たいお弁当を出されることもあり、そうするとスタッフの方でも不満が出てきます。冗談のようですが人間何が怖いかというと食べ物への恨みです。ですから例えばお弁当の発注時間に気を配り、安くてもインスタントのお味噌汁など、温かいものを出すというような気配りをする。それだけで早朝から深夜まで働いている

人間にとっては活力になるので、そういうことが出来る制作部は評価されます。

後は衣装さん。クランクインをする前の俳優さんに役柄に合う衣装を現場にもってきたくれます。衣装さんは現場だけの仕事ですが、それこそセンスが問われる仕事だと思います。ヘアメイクさんは現場のちょっと前から入りますが、俳優さんに衣装部屋ですっと付いていることがあります。この現場の過酷作業の中、俳優にとっては現場ではいつまでも出番が続いているわけではなく、待たされている時間の方が長いので、その時にヘアメイクさんが俳優さんの気持ちをリラックスさせるような気遣いをして下さいます。そういう面でもとても大切な仕事だと思います。

それから編集さん。現場が終わり素材を編集さんに渡して編集していくのですが、その担当者とは合う場合はすごく仕事がやり易いのですが、合わない場合はとても苦労するところです。私がとても好きなのは「俺たちに明日はないッス」、「百万円と苦虫女」を一緒にやってくれた宮島さんという今はもう売れっ子の編集マンです。みなさん誰でも経験があると思いますが、自分にとって痛いことを言われても聞ける人と、この人だけには言われたくないという人がいますよね。現場で苦労して撮った人間にとって、一つ一つのシーンはそう簡単に切りたくはありません。しかしこの宮島さんにこれは短くした方がいいといわれると素直に応じられる、そんな人です。

★一作品撮る期間と予算に関して教えて欲しい

作品の規模によるところが大きく、私は自分の作った映画でしか把握できませんが、有名な俳優さんを使うとそれだけでかなりコストは高くなります。私が撮った映画で言いますと「赤い文化住宅の初子」が大体2000万円程で全部仕上げなくてはなりません。2000万円というと大金と思われるかもしれませんが、現場にいるとお弁当代などの諸経費を含めて1日100万円はかかります。もちろんこの2000万円の中には全ての人のギャラが入っているので2000万円くらいの予算であれば、どうがんばっても2週間という時間がとれば良い方です。ですから2000万円という予算はかなり低予算だと言われています。「俺たちに明日はないッス」もかなり低予算でこれは3000万円程でした。

こうした金額は宣伝費も合わせた額になります。予算が少ないと当然宣伝費にも回せないので、そうすると一般のお客さんにも情報が届きにくいので低予算映画は低予算で厳しいものがあります。「百万円と苦虫女」はもう少し予算が組めて、最終的には1億円位かかっています。最初の予算は8000万円位で見積もりを立てていたのですが、プロデューサーが画策して、そのころは文化庁の助成金がもらえたので、それを申請してあまった分を宣伝費に当てることができました。それでも予算1億少しの映画だと昼にCMが流せません。予告編を作っても、深夜の午前2時とか3時の時間帯に少し宣伝出来るといった感じです。要はお金がいくらあっても足りないということになります。また予算が多くなると当然撮影の規模も大きくなり、スタッフの人数も増え、大作の場合になると、私が脚本だけ出した「さくらん」という映画では現場スタッフが助手を含めて150人から200人位使いましたので、そういう点からいくと

色々面倒な一面もあります。

俳優さんのギャラに関しては、ハリウッド俳優は日本映画1本作れてしまう位のギャラです。例えば私が作った予算が高かった映画、「百万円と苦虫女」の製作費を全部出してもジョニー・デップは出演してくれないでしょう。日本の映画はよほどの奇跡がないかぎり儲かる商売ではないんです。一時期、映画は儲かるのではないかということで、何年か前までは何かと出資してくれるスポンサーもいたのですが、最近は不況ということもあって、なかなか出資者が集まらないのが現状です。ですから日本の俳優さんについて言いますと、おそらく俳優さんはCM、ドラマでお金を稼いでいると思います。映画はどちらかというとステイタス的なところで、ギャラは少ないと思います。ただ渡辺謙さんなどハリウッドで出演してるような方は、ハリウッド価格ではないですがギャラは高いと思います。でも日本では映画のギャラがこれではかわいそうだと言う位安いギャラで俳優さん達は出演していると思います。

★自分の映画作りの中で感じたことを教えて欲しい

自分が関わった映画の中で「百万円と苦虫女」で、先程申し上げたように、あらためて照明さんの凄さを感じまし

た。夜中に朝日を作れるのを見ることは現場でしかわからないようなことを知ることができてよかったですと思います。

「俺たちに明日はないッス」については、私の好きな漫画家、さそうあきらさんの短編集なのですが、好きだからこそ自分では脚本を書かないほうがいいだろうと思い、別の方に任せました。すると私が思っていた以上に原作をリスペクトしつつ、映画にしかなりえない脚本になって返って来たので本当に嬉しく思いました。

毎回映画を撮っていると、監督は何も出来ないということを感じざるばかりで、現場の人達のどうかしているのではないだろうかという程の頑張りには頭が下がります。その頑張りの原動力はやはり俳優さん達のいい芝居が見たいということ。そしてそれに俳優が答えてくれることではないでしょうか。私はカメラのすぐ横で俳優さんの演技を見ていますが、自分の考えていたことと違うアプローチの演技をなさって下さることがあり、ああそういう解釈の仕方もあるのだなと感じた時は、この仕事をやっていて良かったと思います。何より多くのスタッフをはじめ、人を使う仕事なので色々ありますが、大勢使っているからこそ出来ることがあると感じられることが、監督をやっていて一番の幸せだと思っています。